

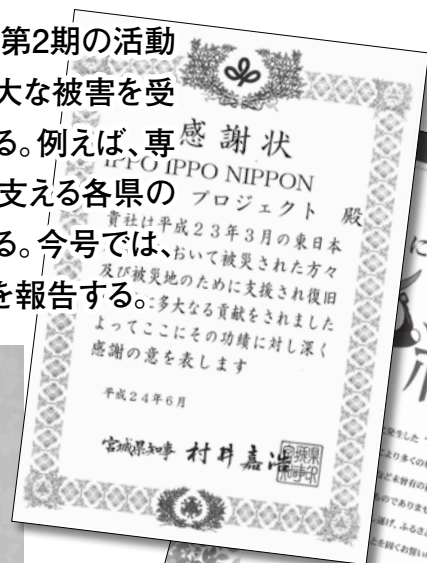
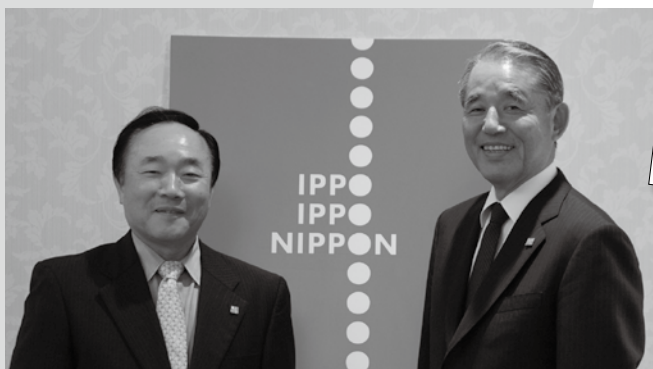
IPP
IPP
NIPPON

特集

IPPO IPPO NIPPON プロジェクト

～被災地の人づくり、産業活性化へ向けた復興支援プロジェクト～

2011年7月の発足以来、IPPO IPPO NIPPON プロジェクトは第1期、第2期の活動を計画通り終え、第3期へ向け始動した(全10期)。東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県、宮城県、福島県へは、既にさまざまな支援が実施されている。例えば、専門高校への実習機材の提供、震災で保護者を亡くされた子どもたちを支える各県の支援基金への協力、新事業創造を担う国公立大学への支援などである。今号では、あらためてその活動概要を説明するとともに第1期、第2期の活動状況を報告する。



INDEX

■概要と活動報告	
第1期、第2期活動終了、総額約6.1億円の支援を実施	P3
■支援先の現況	
被災各地で贈呈式、感謝の声	P5
■出張授業	
企業経営者による出張授業を実施	P7
■第3期活動開始	
復興支援に向けた寄附のお願い	P9

■概要と活動報告

第1期、第2期活動終了、総額約6.1億

“東北の人々や経済が再び元気を取り戻すための力になりたい”。こうした企業経営者たちの思いが一つのかたちになり、2011年7月よりIPPO IPPO NIPPON プロジェクトが始動した。全国の経済同友会と連携し、全国各地の企業・個人へ寄附金を募ったところ、第1期・第2期の活動を通じて集まった寄附金は約6.1億円になり、各支援先へ届けられた。

IPPO IPPO NIPPON プロジェクトとは？

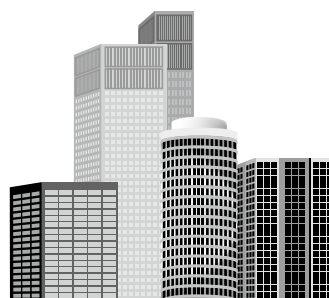
IPPO IPPO NIPPON プロジェクトとは、被災地の声を聞きながら、人づくりや経済活性化に役立つ寄附先を事前に選定し、全国各地の企業・個人より集められた寄附金等を半年ごとに被災地へ届けるプラットフォームである。第1期・第2期活動を通じて、合計6億963万5,060円の寄附金が集まった。10月22日現在、法人295社、個人28名が参加している。

【特徴】

- ①一過性のものに終わらない、震災後5年間10期にわたる息の長い支援を展開。
- ②被災地の経済同友会と連携して、被災地の声を聞きながら支援内容を每期検討し、今まさに必要な支援を実施。
- ③将来を担う若者・子どもたちに重点を置き、被災した専門高校への実習機材の提供、国公立大学による復興事業など、具体的成果や内容が見える支援を展開。
- ④寄附金には、法人税・所得税の税制優遇措置が適用される。
- ⑤運営経費を経済同友会が負担し、お預かりした寄附は全額が被災地支援に充てられる。

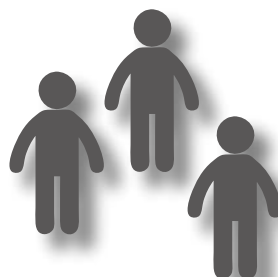
■寄附の流れと第1期・第2期活動概要

参加企業



寄附金拠出

個人



預かり証書
発行

円の支援を実施



IPPO IPPO NIPPON プロジェクト

■寄附総額■

第1期：3億4,150万8,947円

第2期：2億6,812万6,113円

総額 6億963万5,060円

※IPPO IPPO NIPPON プロジェクト運営に関する諸費用(管理費、交通費、通信費、その他人件費)は、全額公益社団法人経済同友会の一般会計より支出し、参加法人・個人から預かった寄附金等は、全額被災地支援に充てている。



寄附金配分
備品提供等

受領書発行

皆さまから
お預かりした寄附金は
全額、被災地支援に
充てています

第1期・第2期支援内容

総額 6億963万5,060円

■人づくり

【専門高校への実習機材の提供】

- ①岩手県立専門高校(全9校)
(小型トラック、調理実習用食器、潜水実習機材など)
- ②宮城県立専門高校(全3校)
(大型バス、移動式クレーン、耕運機など)
- ③福島県立専門高校(全13校)
(トラクター、小型教習艇、ダンプなど)

【震災遺児・孤児の支援基金への寄附】

- ①いわての学び希望基金
- ②みやぎこども育英募金
- ③ふくしまこども寄附金

■経済活性化

【国公立大学法人による復興事業への支援】

- ①岩手大学三陸復興推進事業
- ②東北大学災害復興新生研究機構
- ③東北大学 東北未来創造イニシアティブ
- ④宮城大学復興ステーションプロジェクト

【二本松市】

二本松市放射性物質測定センターへの寄附

■支援先の現況

被災各地で贈呈式、感謝の声

被災した専門高校では、校舎の他、授業に必要不可欠な実習機材も津波被害に遭ったケースが多い。そこでIPPO IPPON NIPPON プロジェクトでは、被災した専門高校に実習機材を支援してきた。また、震災遺児・孤児の支援基金への寄附、さらには地域の人材育成の要である国公立大学へ支援を行ってきた。専門高校や被災県からは感謝の手紙や感謝状が届いている。支援先の現況の一部を紹介する。

専門高校への支援

岩手県立種市高校

同校の海洋開発科は、日本で唯一、専門的に潜水土育成を行っており、卒業生は海中土木工事の専門技術者として、国内外で活躍している。海洋開発科の実習機材は近くにある漁港内の倉庫に保管していたため、大きな被害を受けた。同プロジェクトでは、潜水実習に必要なウェットスーツやヘルメット、水中カメラなどを贈呈した。

宮城県農業高校

同校は津波により校舎が壊滅的被害を受けたため、仮設校舎を設置して授業を実施しているが、実習の際には、遠方の農業施設やグラウンドまで移動している。そのため、通学

に支障をきたす生徒が多く、同プロジェクトでは、昨年12月に通学用の大型バスを贈呈した。その他の宮城県の2校にもバスを贈呈している。

福島県立いわき海星高校

同校では、津波により校舎1階部分が浸水、小型教習艇をはじめとする水上実習機材も失い、県内唯一の水産系高校でありながら、機材不足のために水上実習ができない状況にあった。同プロジェクトでは、水上実習再開に向け、昨年11月に四級小型教習艇を贈呈した。実習時間不足により免許取得が難しかった3年生も、これにより卒業までに免許を取得できたとのこと。その他、レーダーや通信機器などの情報通信機材も贈呈している。



福島県立いわき海星高校



福島県立いわき海星高校・教習艇

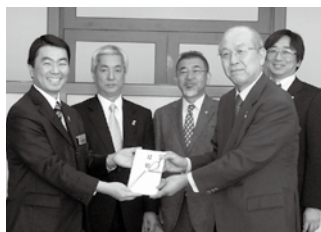


宮城県農業高校・バス



達増岩手県知事(左)と長谷川代表幹事

左側から村井 宮城県知事、一力 仙台経済同友会代表幹事、須佐 運営委員、大山 仙台経済同友会代表幹事、岡野 経済同友会常務理事



■震災遺児・孤児への支援

震災で保護者を亡くした子どもたちの生活を支援するため、「いわての学び希望基金」「みやぎこども育英募金」「ふくしまこども寄附金」へ第1期・第2期活動を通じて、寄附をした。2月に村井嘉浩宮城県知事を訪問、7月には夏季セミナーの際、長谷川閑史代表幹事から達増拓也岩手県知事へ目録の贈呈を行った。

村井宮城県知事からは「厳しい経済情勢にもかかわらず、全国の皆さまより5年間にわたって支援していただけるのは大変ありがたい。教育支援のためにしっかり活用させていただく」、達増岩手県知事からは「寄附は大変ありがたい。県復興計画では、人づくりを重要課題と位置付けており、有効に活用させていただく」と感謝の意が表された。



福島県立相馬農業高校・蒸釜



岩手県立大船渡東高校食物文化科・実習用食器



福島県立磐城農業高校・オープン



福島県立磐城農業高校・高圧洗浄機

生徒からの感想

●今、自分たちは、将来立派なダイバーになれるよう、毎日勉強に励んでいます。私は将来、高校で学んだことを活かして、潜水会社に就職して日本に貢献できるようになりたいと思っています。そのためには、今回頂いた器材を使用させていただき、多くの技術を身に付け、将来立派なダイバーになりたいと思います。

岩手県立種市高校海洋開発科2年

●皆さまへ。このたびは、大震災によって、稲作に必要な実習棟や機械が被災し、これからの米作りをあきらめておりましたが、コンバインや

乾燥機を寄贈していただきありがとうございました。皆さまの絆に答えられるよう、おいしいお米作りに取り組んでいきたいと思ひます。

福島県立磐城農業高校園芸科3年

●今回の地震で食器が割れずにそのままだったら、食器の大切さをあまり分からずに過ごしていたかもしれません。食器を寄附していただいたおかげで、また一つ大切なことを学ぶことができました。食器を寄附していただいた皆さまには、とても感謝しています。この食器は、今後何十年と使っていけるよう大切にしていきたいと思ひます。そして、この温かいご支援に応えるためにも、調理の技術をさらに向上させていきたいと思ひます。

岩手県立大船渡東高校食物文化科2年

●大震災では、私たちが今まで経験したことのないことがたくさん起こり自分の故郷がこのような災害を受け、とても悲しい気持ちになりました。昨年は原発事故で、体育館やプレハブでの勉強を余儀なくされましたが、今は、震災前のように学校で勉強をすることができています。週一回ある実習では、ご支援いただいたボイラーを使って、ジャムやラクピス(ジュース)の製造をしています。以前は、当たり前と思っていたことが、今は、大変幸せに感じ、今まで通りの施設で実習できる喜びを感じています。相農ショップでは、製造したものを売って、地域のたくさんの方々にも喜んでいただいています。私たちのためにご支援をいただき本当にありがとうございました。

福島県立相馬農業高校 食品科学科3年

大学への支援

国公立大学による震災復興事業の支援として、岩手大学三陸復興推進事業、東北大学災害復興新生研究機構および東北未来創造イニシアティブ、宮城大学復興ステーションプロジェクトに寄附をした。東北大学では、事業家・社会起業家の育成、沿岸自治体の首長支援、現場の声をくみ取った提言を行う「東北未来創造イニシアティブ」を発足。経済同友会では、特別協力として協働PTが参画している。今年2月に東北大学に目録を贈呈した際、井上明久総長(当時)から「災害復興には人材が鍵を握る。頂戴した寄附は国の予算が付かないソフト面で活用させていただき、災害科学だけではなく地域の産業振興などに貢献する人材の育成につなげたい」と感謝の意が表された。



東北大学にて。左側から数井 東北大学理事、北村 東北大学副学長(当時)、一力 仙台経済同友会代表幹事、井上 東北大学総長(当時)、須佐 運営委員、大山 仙台経済同友会代表幹事、岡野 経済同友会常務理事

岩手大学からの感謝状



■出張授業……………8月23日

企業経営者による出張授業を実施

IPPO IPPON NIPPON プロジェクトでは、被災地の専門高校への実習機材提供に加え、経営者による出張授業を展開することとした。今年8月には、第1期活動で機材を寄贈した岩手県立釜石商工高校の3年生172名を対象に、小枝至元副代表幹事が出張授業を行った。



働くということ ～社会で求められる力とは～

講師：小枝 至 元副代表幹事（日産自動車 相談役名誉会長）

“一隅を照らす これ即ち国の宝なり”

東日本大震災では、ここにいる多くの方が被災したと聞きました。両親を亡くされた方、今も仮設住宅から通っている方など、大変な努力をされている皆さんに、私は敬意を表します。ぜひ、自分に対して誇りを持ってほしい。

さて、今日は「働くということ」というテーマで、皆さんにお話をしたいと思います。働くということは、人が生活していくために必要な衣食住などにかかわる仕事を、単に役割分担しているということにすぎず、働く分野に上下はありません。“一隅を照らす これ即ち国の宝なり”という言葉があります。平安時代の僧侶、最澄の言葉です。一隅とは、文字通り隅っこということです。つまり、家族や職場など、自分の置かれた場所で精いっぱい努力し、明るく輝く人こそ何ものにも代えがたい国の宝である、ということです。最近、勝ち組負け組という言葉が聞きますが、私は嫌いです。誰が勝ち負けを決めるのですか？何を基準に決めるのですか？そんなことには意味がない。

“一隅を照らす”。この言葉を胸に、今学校で学んでいること、やりたいことを仕事を通じて活かしてほしいし、実現してほしいと思います。

日本の強みを活かし、 世界で発展していく仕事を

今、日本が世界の中で弱いのではないといった報道をよく見かけます。しかし、決してそんなことはありません。世界と比べると日本の強いところはたくさんあります。例えば開発力。特に、環境に関しては高い技術を持っています。少し乱暴な言い方をすると、石油の価格が上がって得をするのは日本です。なぜなら、石油を効率的に使う技術は日本が一番だからです。それから、清潔な社会、犯罪の少なさ、時間の正確さは、世界の中では群を抜いています。今日も新花巻駅に新幹線は定刻通りに着きました。運転手の目標タイムは±5秒だそうです。こんな国は、他にはありません。それから、チームワークの良さも強みです。オリンピックを見ても分かる通り、日本はリレーなどで強さを発揮します。そして、経済力。あまり、マスコミは触れませんが、日本は海外に膨大な資

産を築いています。経常収支の黒字と言いますが、253兆円もあり、世界一です。

こういった日本の強いところを活かして、ぜひ世界に対して発展していく仕事をしてほしいと思います。ちなみに、日産自動車の目標は「日本発の世界企業」になることです。そのためには、社長は社長の、部長は部長の、現場担当は現場担当の役割をしっかりと務めることが大切です。

女性の活躍に期待

今後、働く上で大事なキーワードの一つに“多様性”があります。いろいろな人が、それぞれの立場で貢献できる社会や会社にするということです。特に日本では、今以上に女性の活躍が必要とされています。日本の人口が減少していることは知っていると思いますが、中でも労働力となる生産年齢人口は2010年に8,170万人となり、これが年々100万人近く減っていきます。しかし、生産年齢人口の中の1,200万人は、学生と女



性の無償労働者、つまり家事・育児の主婦層です。この中から毎年10%ずつでも仕事をするようになれば、生産人口年齢は減少しません。だから、ここにいる女子の皆さんにお願いしたい。将来、良い夫を見つけても仕事は辞めずに続けてください。

そのための、育休・産休制度や保育所の問題は、少しずつ良くなっていますが、それ以上に大切なことがあります。これは私の持論です

が、男子の長時間労働をやめることです。これは人々の考え方を変えていかなければならないので難しいことです。方法は、必要な仕事からやっけていき、時間がきたら、スパッとやめること。もう一つは、労働時間を3分の2にする。給料も3分の2になりますが、その分、奥さんが働けば合わせて3分の4で世帯収入は増えます。時間もできるので、育児も交代してできる。ここにいる男子は覚

悟してください。結婚したかったら、“イクメン”になるしかないのです。

最後に皆さんへの期待を話します。将来への希望を持ってください。夢や希望はどんどん変わってもいいのです。努力は必要ですが、無理を해서는はいけません。悩んだり、落ち込んだりすることもあると思いますが、明日が来ない日はないのです。ぜひ、“一隅を照らす国の宝”になってください。

生徒との質疑応答

Q 私は女性ですが、製造の仕事に就きたいと思っています。女性でもできますか？

A 男女の違いは瞬発力ぐらいで、気にするほどのものではありません。例えば、今の工場は非力な女性でも

働けるようにさまざまな工夫があります。技能そのものはそう簡単に覚えられないものではありません。しかし、いったん身に付けた技能は忘れません。日産自動車の製造現場でも女性が働いていますが、結婚して出産したら、どうぞ産休・育休をしっかりってください、とまず言います。その代わり、育児が一段落したら、必ず職場に戻ってきてください、と言います。その方が、素人を雇うより効率的だからです。特に女性は検査などに向いています。実は、耐久力や

注意の持続力は女性の方が優れているのではないかとと思うほどです。

Q 日産自動車の社員に必要な能力は何ですか？

A “日本発の世界企業になる”。この目標を共有できることです。海外には、現地のスタッフがありますが、そこに行って技術指導できるくらいの能力を身に付けてほしいと思います。だからといって、海外勤務をしるということではありません。日本で、与えられた役割を世界に通用するレベルできちんとこなすことが大事なのです。



生徒の感想

●「働くことは分担をすること」という言葉に共感しました。親には、結婚したら家事や育児をと言われていましたが、今日の話を聞いて、仕事を続けて少しでも社会に貢献していこうと思いました。仕事がつらいときには「一隅を照らす これ即ち国の宝なり」の言葉を思い出して乗り越えていこうと思います。

●仕事に対しては大変なイメージしかなかったのですが、働くということは希望を持ち続けて生きていくことだと、新たな考えが生まれ良かったです。

●将来への希望はないと思っていたけど、「明日は来る」という言葉で、そう捨てたものではないと思いました。女性は必要とされていないと思っていたので、必要とされていることを知ってうれしくなりました。人の役に立ちたいという希望ができました。

●「一隅を照らす これ即ち国の宝なり」の言葉、製造業でも女性が必要とされている話には勇気づけられました。日本人は、今まで幾度となく自然災害に苦しめられてきましたが、そのたびに復興してより強い日本に変えてきました。私も日本人ですから、どんなにつらい思いをしても、次に進む前向きな力を持っています。その力を武器に社

会で成長していきたいと思います。

●「明日が来ない日はない」。仕事をする上で、つらいことがあったとき、思い出してがんばろうと思います。

●私は卒業したら釜石で就職しますが、本当は東京や県外に出たくて仕方ありませんでした。でも「一隅を照らす」の言葉を聞いて、少し安心しました。釜石に残って働いていこうという気持ちが強くなりました。

●テレビや新聞では日本のネガティブな話しか聞きませんが、今日、日本の良いところを知り、少し誇りに思いました。これから就職活動が始まります。今日の講義を参考に準備したいと思います。



復興支援に向けた 寄附のお願い

IPPO IPPO NIPPON プロジェクト

—第3期活動開始—

※詳しくは、<http://www.doyukai.or.jp/ippo/activity/act03.html>

■寄附募集期間■

第3期

2012年8月27日(月)～
2013年1月31日(木)

■寄附目標額■

3億2,000万円

最低限度の目標であり、できる限り
多くのご支援をお願いします

被災地は依然として、 継続的な支援が必要な状況です

IPPO IPPO NIPPON プロジェクトでは、既に第3期活動(寄附募集期間：2012年8月27日～2013年1月31日)を開始しています。本誌で紹介したように、これまでの2期にわたる活動では、全国各地の290を超える企業・個人にご協力いただき、総額6.1億円に上る支援を被災3県に所在する専門高校や国公立大学法人などに実施いたしました。しかし、依然として、地震・津波で大きな被害を受けた専門高校では、機材の不足により実習授業が十分に行えない状況が続いており、継続的な支援が必要とされています。また、今後、復旧から復興へと被災地が進んでいく中では、地域経済の持続的な発展に向け、大学による復興事業も重要になっていきます。

第3期活動でも、これまでの人づくりと産業活性化という視点を踏襲して、地場の産業を担う若者の育成(津波で大きな被害を受けた農業、水産、工業などの専門高校への物品提供)を中心に、各県が運営する震災遺児・孤児の生活支援基金、岩手大学・東北大学・宮城大学が取り組む産学連携の復興事業などに資金援助を実施することといたしました。

ぜひとも、「IPPO IPPO NIPPON プロジェクト 第3期活動」への支援を賜りたく、お願い申し上げます。



※ご賛同いただいた方には、年に1回被災地で開催するシンポジウムのご案内をさせていただきます。

※HPにてご賛同いただいた企業名を公開させていただきます(ご了承いただいた場合のみ)。

IPPO IPPO NIPPON プロジェクト 第3期活動概要

■寄附募集の対象

全国の経済同友会に所属する会員、会員所属企業に限らず、本プロジェクトの趣旨に賛同いただける国内外の企業・個人に幅広く協力を呼び掛けます。

■寄附金の使途(支援内容と内訳)について

岩手県、宮城県、福島県にておおむね3等分して、各県において下記の通り実施する支援に充当します。

なお、専門高校への物品提供については、支援が急がれることから、各県とも寄附募集期間満了を待たず、寄附が集まり次第、随時、物品をお届けする予定です。

(1)岩手県

- ①被災した専門高校への物品提供(総額9,000万円相当)
- ②国立大学法人岩手大学への支援(1,800万円)

(2)宮城県

- ①被災した専門高校への物品提供(総額8,500万円相当)
- ②国立大学法人東北大学への支援(300万円)
- ③公立大学法人宮城大学への支援(1,300万円)
- ④東日本大震災みやぎこども育英募金への支援(300万円)

(3)福島県

- ①被災した専門高校への物品提供(総額1億円相当)
- ②東日本大震災ふくしまこども寄附金への支援(800万円)

■運営経費について

本プロジェクトの運営に関する諸費用(管理費、交通費、通信費など)は公益社団法人経済同友会の一般会計より支出し、皆さまからお預かりした寄附金については、全額を復興支援に充当します。

寄附金に関する 税制優遇措置

IPPO IPPO NIPPON プロジェクト 第3期活動に対する寄附金は、税制優遇措置が受けられます。

■寄附金の下限はありません。ご関心のある方は、詳細を送りいたしますので、下記までお問い合わせください。

寄附金 申込先

IPPO IPPO NIPPON プロジェクト 事務局
(経済同友会 事務局内)

Tel : 03-3284-0316 / Fax : 03-3214-6802
E-mail : ippo@doyukai.or.jp